

都道府県別賞一等

生命保険に込められた思い

石川県 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校

二学年

杉本 賢太郎

私の家の近くに、叔祖父が住んでいた。叔祖父は車の整備工場を経営しており、車が大好きだった私はよく遊びに行き、整備の様子を眺めたり、工具を見せてもらったりして楽しい時間を過ごしていた。小さな私は、優しい笑顔で接してくれる叔祖父のことが大好きだった。

そんな叔祖父が、ある日突然、足の痛みを訴えて病院で検査を受けることになった。すると、予想もしなかった事実が判明した。病名はステージ4の大腸ガン。発見された時にはすでに手の施しようがなく、病気はあつという間に進行してしまった。そして、それから一年もたたないうちに、叔祖父は亡くなってしまった。まだ六十三歳という若さだった。

入院中、叔祖父は病床であることを口にしていたという。それは「母親に何も親孝行らしいことをしてこなかったこと」への後悔だった。曾祖父が若くして亡くなったため、女手一つで祖父やその兄弟を育ててきた曾祖母に、せめて最後に何かできることはないか。そう考えた叔祖父は、自分の生命保険の受取人を曾祖母に指定していた。

叔祖父が亡くなった後、生命保険の存在を知らされた曾祖母は、書類を見ながら涙を流したという。何も言わずに先立ってしまったけれど、最後にちゃんと気持ちを届けてくれた。その思いが伝わったのだ。曾祖母は、受け取った保険金でお風呂を使いやすいようにリフォームしたり、今まで遠慮していた介護サービスを気兼ねなく利用したりできるようになった。『気にせずに頼っていいんだよ。』と、叔祖父が背中を押してくれているようだった。

その後、私は両親からも生命保険について話を聞いた。もしものことがあった時に、私や妹が生活に困らないようにと、生命保険に加入してくれているというのだ。私たちが将来の夢を叶えるために心配することなく勉強できるようにと、見えないところで備えてくれている両親の思いに、強い安心感と感謝の気持ちを抱いた。

生命保険とは、単なるお金の問題ではなく、「大切な人を思う気持ち」そのものだと思う。亡くなった人の思いを、残された人にしっかりと届けることができる。それは、言葉にできなかった「ありがとう」や「ごめんね」、そして「これから幸せに生きてほしい」という願いだ。

世の中には、生命保険以外にも、病気やケガ、自然災害などに備える保険が

第63回中学生作文コンクール

ある。すべてのリスクを避けることはできないけれど、備えることで未来への不安を減らすことができる。私も将来、家族を守る立場になった時、自分のできる最善の備えを考え、行動できる人でありたい。

生命保険は、愛する人への「思いやり」のかたち。目には見えなくても、深く強く、心に届くメッセージなのだと思う。